

1日24時間、地球上のどこにしようとは誰もがこの24時間帯の中に生きている。イギリス・ロンドン郊外のグリニッジを起点(協定世界時=UTC+0)にして、地球1周4万kmを1日24時間で南北の子午線15度ごとに1時間の時差の線引きをする。これによりいつでも地球上のあらゆる地点の時間が分かる。

島国日本は東経135度(標準時子午線は兵庫県明石市)の時間帯(UTC+9)の中にすっぽり収まり、普段日常生活で時差を感じることはない。しかし、日本とは異なり、国土が広大で国内にいくつもの時間帯がある国では、国内で発生する事象には常に時差を意識しなければならない。

とりわけロシアは地球上の領土の1/8を占め、世界最大の面積を誇る広大な国である。ヨーロッパのバルト海に面した飛び地・カリーニングラードから極東のカムチャツカ半島まで、10本の子午線により11もの異なる時間帯があり、国内に朝焼けと夕暮れが同時に訪れる珍しい国でもある。更に日本人にとって信じがたいことは、北海道・根室と目の前の北方四島との間に、2時間もの時差があることである。

その一方で、やはり国土の広い中国は、その広い面積から協定上5つの時間帯がある。しかし、今日中国にはたったひとつの北京標準時間(UTC+8)しかない。中華人民共和国が誕生した1949年までは、中国にも協定に従い5つの時間帯があった。だが、政治的、経済的にすべて首都北

京へ一極集中の方針から、今では子午線120度に近い北京の時間帯に統合された。そのためヒマラヤに近いチベットを訪れても本来あるべき2時間の時差がなく、朝晩とも北京より1日が早い印象である。唯一の例外は、チベットと同じ時間帯である筈の新疆ウイグル自治区だけは協定通り、同地方本来の時間帯(UTC+6)で、中国標準時間より2時間遅れとなっている。

国によっては、ひとつの時間帯の中で生活しながらも、国の中心部が子午線からずれている国では、国際標準時間の1時間単位ではなく、現地時間は分単位になり、やや細かく複雑になる。アジアでもイラン(UTC+4.30)や、インド(UTC+5.30)、ミャンマー(UTC+6.30)のように、地形的に捉えて30分単位で現地時間を定めた国もある。

以前搭乗したテヘラン行航空機がニューデリーに立ち寄った時、1人のネパール人が乗り込んできて私の隣に座った。ネパール(UTC+5.45)とインドは、時差がほんの15分しかないため、彼の時計の針はネパール時間のままだった。だが、この先テヘランへ行くとなると1時間15分遅らせなければいけない。彼はその時差調整がうまく出来ないからと、不意に私に腕時計を差し出し、イラン時間に合わせて欲しいと懇願されたことがある。

あれからあのネパール人は、また別の国へ行ったことだろう。果たして新しい旅行先で現地時間に時計と身体をうまく調整することができただろうか。